

聞いて驚け、最近の吸血鬼は日光に耐性がついたんだとき。

「あー。たるー」

青い空へと一筋紫煙が立ち昇っていく。

ご機嫌うるわしい陽気とのどかな光景があくびを誘い、眠たげにぼやく。

「そもそも完全禁煙制つても法的拘束力はないんだよなー。言わぬが華だけど」

今はサボり……じゃなくて、心の洗濯喫煙タイム。

選んだ場所は最近のお気に入り、気持ちいい風が吹くコンクリ張りの屋上。

教師だつて一日中授業してるわけじゃない、時間割の調整で体が空くこともある。

そう、俺たちは聖人君子じゃない。

よく言うけど教師である前に人間なのだ。もちろん人並みに性欲だつてありますよ？

目に染みるような青空とマシマロのような雲とを眺め、一種の感慨に耽る。

そう、教師だつて聖人君子ばかりじゃない。

休み時間に屋上でぶかぶか煙草を吹かす不良教師もいれば、軽薄でナンパな若造を煙たがる団塊世代の先生方もいらつしやるわけで、正式に教職についてまだ二ヶ月も経つてな

い俺は、派閥争いだの何だの面倒くさい人間関係に巻き込まれるの嫌さに適当な口実をもうけ外をふらつのが習慣になつている。

「教師、向いてなかったかな……」

そもそも、教師つてもつと情熱あるやつがなるもんだと思う。

俺みたいに周りに流されてなんとなく、夢も目的も野望もなく、お前はちゃんぼらんできとーな人間だからせめて食いつぶされる心配ない職業につけと親に説得され、補講に補講を重ね教員免許を取得したようなやつは、きっと教師を名乗る資格がないだろう。

軽快な着メロが憂鬱な思考を払う。

ズボンに突っ込んだ携帯を開いてメールチェック、送信者の名前に自然と鼻の下がのびちまう。

先日、大学の同期と合コンした際に知り合った女の子からメールが来てた。

「よつしや」

心の中でガッツポーズ、でれでれだらしなくにやけまくつてメールに目を通していく。

『こないだの合コン楽しかったー小山内くんて面白いねー今度また飲もうよ（できればふたりで）』

おおまかに要約するとそんな内容で、おお脈ありじゃんさ

すが俺、女受け上々と、世のモチない男どもから袋叩きされそうな優越感に酔って自画自賛。

俺も楽しかったよと返信を打とうとして、どこからかかすかに流れる異音に気付く。

「……誰だ、屋上でラーメン食ってんのは」

まさか。

職寝室ならともかくここは屋上で、しかもラーメン屋が高校に出前に来るとかありえなくて。

じゃああの音はなんだ一体？

奇妙な音に興味を引かれ、携帯をしまう。大きく迂回しつつ、音源に赴く。

正体不明の音は隆々とそそりたつ巨大な給水塔のうしろから聞こえてくる。

給水塔の壁面に手をつき、抜き足差し足忍び足でのぞきこむ。

最初に声をかけりやいいものを、わざわざスパイのような真似をしたのはほんの遊び心。

「誰だ、午前中からラーメン喫ってんのは？ 罰としてナルト没収……」

笑顔が硬直。

給水塔の、裏。

心臓の弱い人にはおすすめしない、スプラッタな光景が広がっていた。

まず真つ先に飛び込んできたのはブレザーの華奢な背中、そいつは俺に背中を向け片膝ついて誰かを抱いていて、その誰かは紺のプリーツスカートからすんなり伸びた足を見るにうちの生徒で……

待て、どういうことだ。

ずるずると美味しそうな音がする。液体状の何かを啜る音。仰向けに寝かせて抱いた生徒の首に口をつけ、ずるずる啜るものといったらただひとつ。

「ひっ……」

腰が抜ける。尻餅つく音でこつちをむく。

金髪翠眼の、おっそろしくキレイな顔があった。

「あれ、先生。困ったなあ、まずいとこ見られちゃった」

そいつは悪びれずにつこり笑う。

口元にべっとり血がこびりついてなきや、天使のような形容したい、神々しい笑み。

記憶を検索し顔と名前を照合、戦慄く指先でそいつをさしつつあとじきる。

口がぱくつく。酸欠に陥る一歩手前で喘ぐように深呼吸、固い唾を嚥下。

「えっ……と、お前、二年一組の、名前……」

「ステヴァン・パイヤーです。出席番号は八番。ご希望なら生年月日血液型スリーサイズ好きなお笑い芸人も教えませんが」

腰が抜けた俺と対峙する少年の名前は、ステヴァン。

今年から二年に編入したハーフの少年で、背景に薔薇でも散らしたい耽美な容貌で全校女子を騒がせている。煙のように長い睫毛が物憂く影を落とす頬はアラバスターの白さ。絹のような質感の金髪は丁寧に巻かれ柔らかに顔の輪郭を縁取り、謙遜するような微笑みは実に感じが良い。

最前までひとの血を吸ってなけりゃの話だ。

「お前なにしてんだ?! 死、死、血……」

「気絶してるだけです。ご心配なく。そのうち目覚めます。念のため保健室に運びますか? 貧血って診断されるでしょうけど」

安心させるように微笑む。落ち着き払った口調に激しい違和感を抱く。

口元の血のせいか酷薄で邪悪な色の瞳のせいとか、どことなくアルカイックでミステリアスな笑みを浮かべるステヴァンを突き飛ばし、その腕から生徒を奪う。

大丈夫、息はある。

耳をつけ、心臓がちやんと動いてるのを確かめほつとする。

本当に気絶してるだけみたいだ。

腕の中でぐったりする女生徒をざっと観察、しどけなくめくれたスカートを目を逸らし直す傍ら、項垂れた首筋に開いた一対の穴に着目。

鋭利な牙で突き破られた皮膚から新鮮な血が零れる。

「!! お前っ、なにしたっ」

犯人候補はひとりしかない。

声を荒げ詰問する俺をよそに、ステヴァンは優雅に腰を上げ、そして……

「鉄分補給ですよ、小山内センセ」

吊り上げた唇の端から、異様に発達した真珠色の犬歯を覗かせ、晒う。

人間にはありえない長さ鋭さの立派な牙。

「くっ!?」

魂切る悲鳴をあげ四つんばいで逃走、しかけ慌てて逆戻り、動転のあまり放り出した女生徒を拾う。女生徒をひきずるようにして這う背中に視線を感じる、ステヴァンがそこはかとなく不気味さ漂う笑顔で俺を眺め小声で何かを呟く。太陽の逆光になった顔に、牙の存在感をいつそう際立てる耽美な陰影がつく。

「……………口封じ」

物騒な単語に全身の産毛が静電気を孕んで逆立つ。

給水塔の威圧と逆光の効果を背負って、得体の知れぬ魔性のオーラを纏うステヴァンの瞳孔が、猫のそのように縦長に収縮する。

屋上を全力疾走で突っ切り、ゴールの鉄扉を蹴り開けて転げこむ。

「牙、生えてたよな。血、吸ってたよな。つーことはあれは……」

吸血鬼。

鉄扉を閉めた途端体の力が抜け、へなへなとその場に崩れ落ちた。

「二年一組のステヴァン・パイヤーですか。知ってるものにも校内一の有名人ですよ、彼」

隣の机の萩尾先生がテストを採点しつつ言う。

女生徒を保健室に預け職寝室に戻るや、早速ベテラン女教師を掴まえて、情報収集を開始した。

さいわい犠牲者、もとい被害者の女生徒は気絶してるだけで命に別状なし。

少し貧血の症状を呈してる他に異常はないそうで、非力な校医の指示を受け、彼女をベッドに寝かせようとしたまじにその瞬間にはつちり目を開けて「超セクハラ!!」とピン

タをくれるだけの元気があった。セクハラ言うならそんな短いスカートはくな、校則違反だ。

右頬に真っ赤なもみじを咲かせ、萩尾先生の話に耳を傾ける。

「父親は俳優上がり映画監督、母親は日本人女性。幼い頃に両親が離婚して以来ずっと父子家庭で暮らしてたんです。うちが二年に編入しました」

「ずっと海外暮らし？ 日本語べらべらでしたよ」

「英才教育のためものでしょう。もしくはよほど環境への適応力が高いのか」

二年一組のステヴァン・パイヤー。

授業で何回か顔をあわせたが特別意識してなかった。だつて男だし。

「成績は上々、テスト順位は常にトップ10内。おまけにものすごい美少年でしょう、ウイーン少年合唱団にいそうな」

「少年合唱団に入るにはどうがたちすぎてるんじゃないかな……」

「特に女子の人気がすごい。彼はスマートな紳士ですから歩く時は常に女子に譲り、あらかじめドアを開けておく。そういうふうにはジェントリにエスコートするんです」

「キザなやつだなあ」

父親の名前を聞き、合点がいく。

恋愛映画の巨匠として絶賛される大物監督だった。

「待ってください、そんな有名な人のご息がなんだったってこんな偏差値中の下の平凡な公立校に」

「お世話になつてる職場にむかつて失礼ですよ」

萩尾先生に注意され、反省のふりだけ。いや、だって事実だし。

「よくわからないけど、彼にも色々事情があるんじゃないですかね。気になるなら本人に聞いてみたらどうですか？」
つれなくそう言つて話を打ち切る。

「それができれば苦労しません……」

しよげて頬杖をつく。

白髪まじりの髪をきつくひつつめた、化粧気のないオールドミスの横顔をちら見。

緊張に乾いた唇をなめ、タイミングを見計らい、聞く。

「ところで、萩尾先生の授業中ステヴァンは不審な行動をとつたりしませんか」

「不審な行動？ カンニング疑惑ですか」

風紀に厳格な萩尾先生の顔がにわかには真剣みを増す。
険のある目つきで一瞥、背筋を伸ばしてペンを置く。

「いえいえ、そういうんじゃない」

「煙草？ 覚せい剤？ 携帯ゲーム機持ち込み？」

眉間の皺がどんどん深くなつていく。

目元が神経質に引き攣り、今にも亀裂が生じそう。

生徒の一人に校則違反の疑惑が持ち上がるやがぜん興味を示し、セルフレームのメガネを押し上げ詰め寄る剣幕にたじろぐ。

「ひよつとして大麻ですか、むこうの高校では遊び感覚で普通に吸うとか……ああ、なんておぞましい退廃文化。偏見は持ちたくないけどお父さまが映画監督だとやっぱインスピ得るために大麻を吸うのは日常で、息子の彼も影響されて」

萩尾先生こそ何の雑誌に影響されてるんだろう。意外とミーハーだこの人。

慌てて手を振つて妄想を打ち消し、軌道修正を図る。

「いえいえ大麻じゃなくて！ たとえばですね、女子と話すときに物欲しげに首筋を見てるとか、やたら首筋にさわるとか、噛み癖があるとか」

「犬猫じゃあるまいし」

萩尾の体からすつと殺気が抜ける。

興味が見せたように椅子を引いて自分のデスクに戻る。

「私が見る限りそんなの全然ありません。だいたい異性と話すときに首筋の一点見つめて動かないなんてふしだらです」

「ですよねー……」

胸ならわかるけど首でもセクハラなのだろうか。判定きびしい。

萩尾先生はメガネをはずしレンズを拭く。近眼、いや老眼？
「質問の意図が不明確です。一体ステヴアンくんの何を知りたいんですか」

吸血鬼か否か、そして願わくば身を守る方法を知りたい……
なんて、口が裂けても言えない。こつちの正気を疑われる屋上で衝撃の出会いをしてから一時間後、間の悪い事に次は問題の二年一組の授業。

予鈴が鳴る。びくりとする。

職員室で茶飲み話に興じていた先生方が一人また一人と予鈴につられ席を立ち、教科書やレジュメ小脇に教室へ向かう。

萩尾先生も席を立つ。

採点済みの答案を束ねてまとめ胸に抱き、ついでのよう言う。

「小山内先生も早くしないと。先生が遅刻なんて生徒にしめがつきませんから、いつまでも学生気分でいられちゃ困ります」

あとはもう振り返りもせず、職寝室を出て行く。

ああ、憂鬱だ。

「吸血鬼の苦手なものってなんだっけ……そうだ、にんにく！」

がらりと引き出しをあげ、そこに常備していた栄養ドリンクの中からにんにくエキスが入った一本を一気飲み。

「うー、効つくう」

これから吸血鬼に会いに行く。